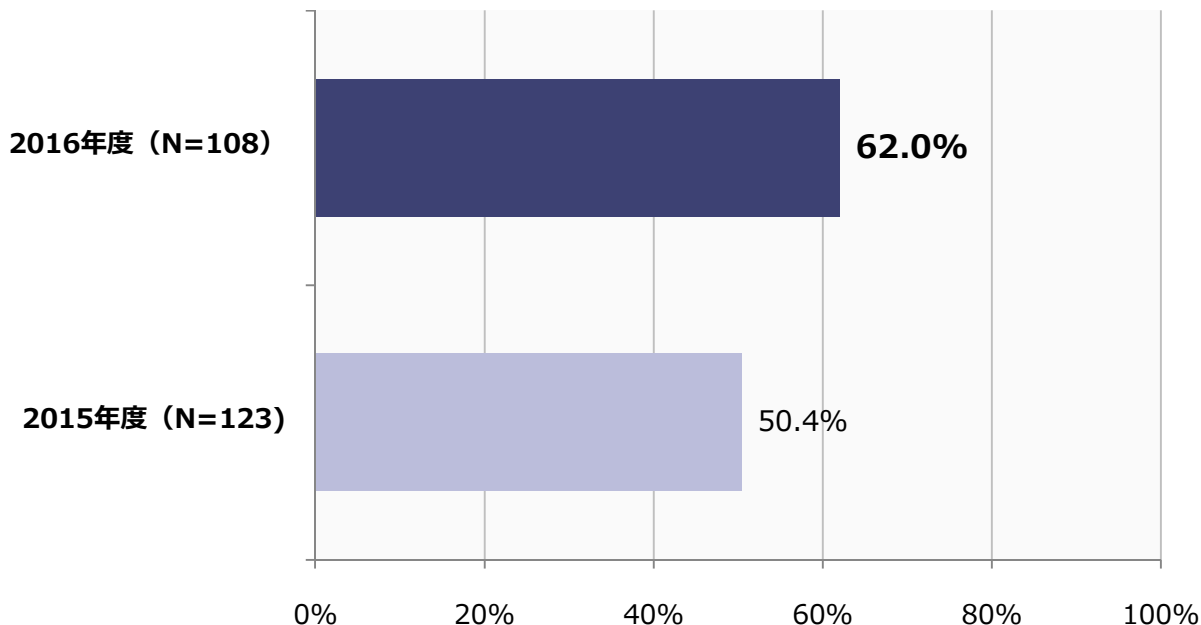


大腿骨近位部骨折に対する深部静脈血栓症のスクリーニング

大腿骨近位端骨折における深部静脈血栓症の発生頻度その予防を行わなかった場合30～50パーセントであり、そのうち致命的肺血栓症に至る頻度は0.1～7.5パーセントです。

したがって大腿骨近位端骨折の患者においては深部静脈血栓症の予防を行うと同時に、術前にスクリーニングを行い、診断がついたら必要に応じてその治療を行うことが重要です。D-ダイマーは深部静脈血栓症のスクリーニングとして有用であり、その感度は100%近いとされていました。大腿骨近位端骨折の術前患者に対しては前例血液検査でD-ダイマーの値を測定し、深部静脈血栓症が疑われたら静脈エコー検査などを行う方針としています。



当院値の定義・算出方法

分子：手術を必要とする大腿骨頸部骨折、大腿骨転子部骨折、大腿骨転子下骨折、大腿骨骨幹部骨折の患者で、術前にD-ダイマーの測定を行った患者数

分母：手術を必要とする大腿骨頸部骨折、大腿骨転子部骨折、大腿骨転子下骨折、大腿骨骨幹部骨折の患者数

※グラフ中のN数は分母の値を示しています。

解説(コメント)

大腿骨頸部骨折、大腿骨転子部骨折、大腿骨転子下骨折、大腿骨骨幹部骨折の患者において肺塞栓症は生命に危険性に関わる重大な合併症です。ダイマーの測定はその原疾患である深部静脈血栓症のスクリーニング検査として最も有用とされているため、術前にD-ダイマーを測定して早期に深部静脈血栓症を検出することによって、肺塞栓症の危険性を減少することを目標としています。

改善策について

術前のルーチン検査に組み込むようにしています。2016年度の症候性の肺塞栓症の発生はありませんでした。

文責：整形外科主任部長
松垣 亨